

アイヌの人たちの歴史・文化

住 居

■ チセ(家)の建て方

- チセを建てる土地の選定にあたっては、海や川近くで、食料や水が豊富に得ることができ、しかも洪水や山津波、崖崩れなどの危険がない場所が選ばれました。同時に場所を定めるには、その土地がチセに適しているかどうかを夢占い^{*1}もします。土地が選定されると、村の人が総出で整地を行い、チセの柱や壁材、屋根材となるカツラ、クリ、萱、笹^{*2}、樹皮など、その地方で豊富に調達できるものを採集します。
- チセの建築は、まず地面の上で屋根組をつくることから始まり、次に柱を建てます。柱は掘立で先がY字形の受け状になっています。こうして骨組ができると、柱に丸太で組んだ屋根をあげ、骨組の木をブドウツルやシナノキの内皮でつくった、縄などをつかって結びつけます。壁や屋根の材料は、あらかじめ採集してある萱、笹^{*2}、樹皮などを使い縛りながら葺いていきます。チセの回りには雨水が入ってこないように溝が掘られ、壁に少し土盛りをします。チセの他にミンタラ(庭)、祈りの場であるヌサ(祭壇)、アシンル(便所)、物干し、食料を蓄えておくブ(倉)などがあります。

*1 建て主の約7日間の夢の良し悪しで判断します。

*2 笹を材料としてチセを建てるのは旭川と旭川周辺、道央部

■ チセの内部

- チセの中央にアペオイ(炉)があり、その両側が居間と寝床で家族や客の座る場所も決まっています。炉の中心には、「アペフチカムイ(火の神)」がいてと考えられています。一家が安全にそして平和に暮らせるように見守っていると信じられていました。炉の火は絶やすことはありません。
- さらに奥には宝物置場があり、神々の出入りする「神窓」があり、神窓は「アペフチカムイ」と「ヌサ」の神を結ぶ神聖な窓として位置付けられています。また2つの明かりとりの窓があります。

■ チセノミとチセコロカムイ

- 3~7日ほどでチセが完成するとコタンの人々や親せきを集めて「チセノミ(新築祝い)」が執り行われます。チセに魂を入れ、さらに家庭での生活の安全を祈る儀式です。人々が集まると、長老が炉にはじめて火を入れます。そして「チセコロカムイ(家の守護神)」のイナウ(木幣)を作り屋内の宝物置場の上部に安置します。

■ コタン

- 人々は村おさを中心に「コタン」と呼ばれる村をつくりました。そのコタンには数軒から十数軒のチセが立ち並んでいました。



< 復元されたチセ、食料庫、祭壇 >

< チセの内部、左座、右座は上座より左が左座、右が右座です。 >



((財)アイヌ文化振興・研究推進機構より)

【出典】『アイヌ文化の基礎知識』 (財)白老民族文化伝承保存財団発行

『ボン カンビシ』アイヌ文化紹介 小冊子4、住まい 北海道立アイヌ民族文化研究センター編

アイヌ語 豆知識

今回は、住居に関連するアイヌ語の一例を紹介します。

アパ(apá) = 戸 ソ(so) = 床 イクシペ(i-kus-pe) = 柱 セム(sem) = 物置 アペ(ape) = 火
キナ(kina) = 敷物(鶴川・旭川地方の言い方) アペバスイ(ape-pasuy) = 火箸
イヌンベ(inumpe) = 炉ぶち ロルンブヤラ(ror-un-puyar) = 神窓(上座の窓) プヤラ(puyar) = 窓
チセキタイ(cisekitay) = 屋根 セマパ(sem-apa) = 入り口、玄関

【出典】『萱野 茂のアイヌ語辞典』 萱野 茂 著 三省堂

